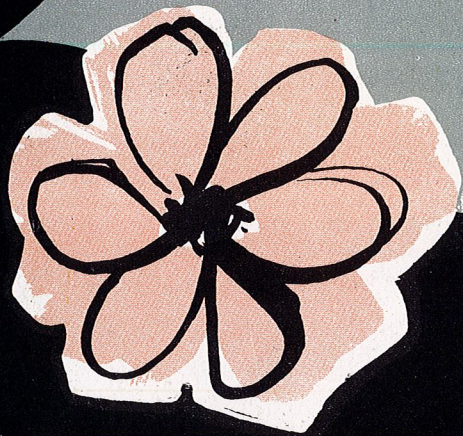


魅力美容に

クラブ美身クリーム



クラブヘアートニック
美髪養毛料

Aiko.

東西四大孝合唱音楽會

同志社 グリークラブ

関西学院 グリークラブ

早稲田大学 グリークラブ

慶應義塾ワグネルソサエティー

**BIG FOUR UNIV.
JOINT CHORUS CONCERT**

20th, Sept. 1953

TOKYO

Conducted by

DOSHISHA GLEE CLUB
TERAMOTO, KAZUI HI
KWANSEI GAKUIN GLEE CLUB
KITAMURA, KYOICHI
WASEDA UNIV. GLEE CLUB
KINOSHITA, RINSAKU
KEIO GIZYUKU WAGNER SOCIETY
KANAI, MASAYUKI

東西四大学
合唱交歓音楽会

同志社グリークラブ
関西学院グリークラブ
早稲田大学グリークラブ
慶応義塾ワグネル・ソサイエティ

昭和28年9月20日 日本青年館

GREETING

同志社大学総長

大塚 節 治

同志社創立者新島襄先生の言葉によれば、私学存立の意義は、国民教育に対する国民の自主的貢献の実を完うし「独自一己の気象を発揮し、自治自立の人民を養成」するにあります。

吾国に於ける何れの私学も此の使命達成のため永年努力を重ね、更に近來は私立大学連盟を結んで友誼を厚くし、加えて私学共通の得失問題につき共同対処の実を挙げ、私学発展に資して参りましたが、今日連盟中四大学の音楽同好学生諸君が、お互いにその技を通じて交誼を重ねるのみならず、相提携して共同の目的に向い、社会に呼びかけることは極めて有意義のことと存じます。

戦後の大衆を風靡する音楽のうちには、私共の是認し難いものが無いでもありません。此の際、諸君の音楽が健康にして正しいものを大衆に示し、大衆の音楽に一つの光明をかかげんことを切に祈ります。

関西学院大学院長

今 田 恵

昨年東京の二大学を迎えて、大阪で開かれた合唱大会の記憶はまだ鮮かであり、静かに思えば、一つ一つの歌声がなお耳底に残っている。ステージの上から聞えた歌は当然であるが、会果てし後、互に交歓し惜別して会場前に歌い交して歌つた歌の印象もまた深い。歌は生活になつていたのである。今年一年を経過し、今年は東に迎えられて此の大会が開かれることは、楽しくもまた喜ばしき限りである。年毎に歌は流れて交りは益々親しく、気風に愈々清く、志しは更に高く、音楽の向上を期すると共に、四大学の学風振興に寄与することあらんことを祈念するものである。

早稲田大学総長

島 田 孝 一

このたび東西四大学合同演奏会が開催されるに当つて、祝意を表する機会を得ました事を心から感謝いたします。

戦後のめくまれない環境にありながら、学生の積極的意欲によつて、この種文化活動が澎湃として展り、より高いものへの願望が着々と印せられつつあります事は、諸君が吾国の将来への方途を明確に把握していることの証左と考へて、洵に欣ばしき限りであります。

今日、日本の合唱音楽がこれ程の隆昌を見るに至りました要因は、心の翹いを求むる真摯な学生達が、戦後いち早くその復活を図り、常に学生文化運動の中必として、人の心の和を叫びながら、ひたむきに努力した結晶と想います。

合唱音楽は、宗教、民謡、歌劇と多様なものがあるでしょうが、その様な様式に於ても又いかなる環境にあつても、その靄郁として流れくるハーモニーに接するとき、ほのぼのと心あたたまるものを覚えると同時に、人間の美へのこよなき憧れと理想追求への情熱を切実に感じます。

この意味に於て、今回、若人の汚れなき熱と意気の現れとして開かれるこの合同演奏会に対し、深甚なる賛意を表すと共に、今後のたゆまざる健闘を祈り、将来への大いなる発展を期してやみません。

慶応義塾長

潮 田 江 次

このたび同志社、関西学院、早稲田、及び慶応義塾、四大学が合唱の交歓演奏会を開催する機会を得た事は慶応義塾長として真に欣懐に堪えない。

そもそも人間の生活にとつて音楽は一つの糧であり、潤いの泉である。しかしながら我國の音楽界をみるに、戦後凶況の発展をなしたとはいえその普及度は欧米に比し極めて低いものであり、それが国民生活の中に真に融合したものとなるには、今後一層の努力が必要とされる。ここに東西四つの大学合唱団がその二度目の試みとして交歓演奏会を開く事は音楽の普及と発展にも、また大学相互の親睦の爲にも劃期的な意義をもつものである。本交歓演奏会がその期する所の目的を充分に果たされん事を願つて止まない。

Programme

エール交歓

第一部

I 慶応義塾ワグネル・ソサイエティー

指揮 金井政幸

☆日本歌曲集

- | | |
|--------------|--------------------|
| 1. 帰ろ 帰ろ | 北原白秋作詩 山田耕筰作曲 |
| 2. きつねのちようちん | 野口雨情作詩 山田耕筰作曲 |
| 3. 青 蛙 | 三木露風作詩 山田耕筰作曲 |
| 4. 叱 ら れ て | 清水かつろ作詩 弘田龍太郎作曲 |
| 5. 七 つ の 子 | 野口雨情作詩 中山晋平作曲 |

II 関西学院グリークラブ

指揮 北村協一
ピアノ伴奏 福永陽一郎

- | | |
|----------------------|---|
| 1. 君はやすらひ | F. Schubert op. 59. No. 3 緒園淳子訳詞 林雄一郎編曲 |
| 2. そよ風よ運べ | F. Mendelssohn曲 津川圭一訳詞 林雄一郎編曲 |
| 3. The Rosory | E. W. Nevin曲 林雄一郎編曲 |
| 4. Wiee you Remember | S. Romberg曲 林雄一郎編曲 |

III 早稲田大学グリークラブ

指揮 木下林策
大木惇夫・伊藤武夫共訳

☆英国民謡集

1. アニー・ローリー
2. 誰かが誰かを
3. 埴生の宿
4. 思い出
5. 我がバステル
6. 楽しかりし昔

IV 同志社グリークラブ

指揮 寺本和市

Saered Songs

- | | |
|--------------------------|---------------------|
| a. Pie Tesu | N. A. Montani |
| b. Adoramus te | J. Clement |
| c. Surrexit Pastor Bouns | G. P. da Palestrina |

休 憩

第二部

V 関西学院グリークラブ

指揮 北村協一

☆組曲 月光とピエロ

堀口大学詞
清水脩曲

- 月 夜
秋のピエロ
ピエロ
ピエロの嘆き
月光とピエロとピエレットの唐草模様

VI 慶応義塾ワグネル・ソサイエティー

指揮 金井政幸
ピアノ伴奏 松原秀一

☆Schubert合唱曲集

- | | |
|---------|---------|
| 1. 春 | |
| 2. 飛鳥の群 | OP 64の3 |
| 3. 小夜曲 | OP 35 |

VII 同志社グリークラブ

指揮 寺本和市

Russian Folk Songs

- | | |
|------------------------|-------------------|
| a. Those Evening Bells | Arr. by S. Jaroff |
| b. The Platoff Song | 〃 |
| c. The Twelve Robbers | 〃 |
| d. Heave Ahoy Ho! | 〃 |

VIII 早稲田大学グリークラブ

指揮 木下林策

- | | |
|-----------------|--------------------------|
| 1. ね ず み | 磯部淑作曲 与謝野晶子作詩 |
| 2. Die Allmacht | V. Lachner曲 早大グリークラブ訳 |
| 3. 幻を追いて | F. Hegar曲 |

合 同 演 奏

指揮 福永陽一郎

1. いざ起て戦さびど
2. Oh morn of Beauty
3. のぞみの鳥

同志社グリークラブ

同志社グリークラブは創立以来四十八年、現在部員総数八十数名と云う大世帯で校内演奏は勿論、放送に演接旅行に活躍しグリークラブでの目的たる「同志社精神を戴し、メンバー相互のメンタルハーモニー・カルテジライフの向上」に不断の精進を続けている。

草分時代の明治三十六年頃には単に讃美歌を練習する為の小グループに過ぎなかつたが、それが明治四十四年片桐哲氏がこれを同志社グリークラブと名付け、初代指揮者となり始めて組織化された。所が、この合唱団は宗教本位で聖歌隊的なものだったので、これに飽きたりない学生が大正二年プリムローズクラブなる合唱団を組織して、一般の合唱音楽の研究に努めるようになった。以後両合唱団は、或は共に或は別に発表会、コンクール、演奏旅行等に活躍発展した。その旅行の足跡は国内は勿論、遠く朝鮮、満洲、中国、台湾にまで及んで居る。

昭和十六年、二つの合唱団は合併し同志社大学男声合唱団となり、両方の性格を兼備するようになった。その後戦争の激化と共に音楽活動もままにならず一時は練習もとだえ勝ちとなつたが、戦後いちやく復活し同志社グリークラブとして再発足し今日に到っている。その間毎年の立教グリークラブとの交歓演奏会に、コンクール、放送、発表会に研究と努力を続けて来ている。コンクールに於ける成績に関西に於ては一位三回、二位三回、全日本では二位一回と、それに一昨年で一位を得ている。かくの如く半世紀にわたる輝かしい歴史の間に約二百名の先輩を送り今尚音楽界に活躍中の内畑栄一、大中寅二、湯浅永年、山口隆俊、宅孝二の諸氏もその中の一人である。

曲目解説

Sacred Songs (宗教曲)

歌おうとして歌つたのではなく、祈りの気持が思わず歌となつて表現された曲。私達は歌うたびに、その祈りの清純さ、その信仰の叫びの激しさに、深く心を打たれます。

ハーモニーを重んじた Montani (モンターニ) の Pie Jesu (あわれみ深き主よ)。単純なテーマによる対位法的手法を用いた Palestrina (パレストリーナ) の Surrexit Pastor Bouns (勝ちませる君)。又、それ等のタイプを兼ねそなえた Clement (クレマン) の静かな Adoramus te (我等汝を祝福せん)。時代の差こそあれ、そこには共に父なる神に対する祈りが見出せます。

モンターニは20世紀初期、活躍したと思われる教会音楽の大家。

パレストリーナは16世紀イタリアの教会音楽の大家。

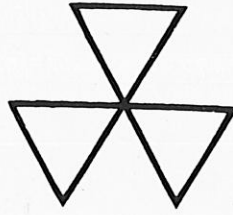
クレマンは16世紀中期のフランスの作曲家

Russian Folk Songs (ロシア民謡)

古いロシアの民謡。ロシア人の独特のねばり強い性格がその儘歌われているのではないでしょうか。拍子の自由な変化は適度の明るさを加え豊かな表現を欲しい儘にしています。

特に三曲目の The Twelve Robbers (十二人の盗賊) に於いてその特徴が発揮され、もの静かな抒情詩 The Evening Bells (夕べの鐘)、軽いリズムの The Platoff Song (プラトフの唄) 泥臭い力強い Heave Ahoy Ho! (ヴォルガの舟唄)。

何れも、ドンコサツク合唱団愛唱歌で、その合唱団に適した編曲が、指揮者 S. Jaroff (セルゲ・セーロフ) によつてなされています。そして、その音域は三オクターヴに亘る広さを持っています。泥臭い中にそのスケールの大きい深さ。



関西学院グリークラブ

明治三十二年、我が国最古のグリークラブが原田の森に孤々の声を上げた。爾来五十三年我が国合唱界に古い伝統と歴史を持ち続けている。

誕生当初には山田耕筰生輩等活躍され、当時の事は氏の近著「若き日の狂想曲」に書かれてある。その後津川主一生輩、由木康先輩等が一つの黄金時代を作られた。原田の森より上ヶ原台地に居を移した頃、作曲家大沢寿人生輩が出られ、昭和八年には林雄一郎先輩の棒が日比谷に孤を画き、ここに八、九、十年三年連続全国一の偉業をなし、空前の黄金時代が記録された。軍靴の音が上ヶ原にも響き、部員も学業半ばにして次々に学院を離れて行つたがその間も練習は一度も絶えることなく続けられた。国敗れ平和が再び訪れ、いち早く学院に戻つた部員が部の再建に努力され、昭和二十三年第一回全国コンクールより回を重ねること四度、全国制覇の栄冠を持続している。

現在メンバーは約七十名、常に学生団体としてたがいに切磋琢磨し、メンタルハーモニーをモットーとして絶えず、技術の向上を図り、精進を重ねて居る。

曲目解説

君はやすらひ

楽聖 F. Schubert (1797—1827) の作品 59の3として知られる有名な声楽曲である。

“君こそわが心の憩いよ、わが胸を閉ざせる雲も君の優しき手によりとりてよ。我が身も心も君に捧げん。君こそ我が憩いなれば……。”

そよ風よ運べ

独乙浪漫派の代表 Mendelssohn (1809—1847) の作品 63の1に当る美しい歌で、1836年の作とされている。元來は二重唱で佳き人に寄せる我が想ひをそよ風の翼にのせておくらんとする若者の心を歌う愛の歌。

The Rosory

ローザリーの歌は欧米にかくれない愛の名歌で、名歌手と称されたシューマンハイク、アルマ、グルツク、マツコマツクのような人達が好んで歌っている。曲は戀人に別れた佳人が首にかけた真珠の珠致をつまぐりながら、去りにし日の思ひ出に寂しい心地となる深刻な人の心を動かす哀音を表現している。秋の夕、落ちゆく枯葉を眺めつゝこの歌を唱う時、誰れしも人生の無情を思い涙にむせぶであろう。

Will you Remember

Operetta “Maylime” の中 „Sweetheart” のテーマで歌はれる愛の歌。男声合唱の巾のあるハーモニーのハミングにのつて、美しい愛のメロディーが流れてゆく。

春の一日愛を共に語りし佳き人よ、永遠に若く美しくあれ。そして共に春の一日の想ひ出を、又二人の愛を語り明かそうではないか。

猶、以上四曲何れも関西学院グリークラブ O. B. 林雄一郎氏の編曲になるものである。

組曲 月光とピエロ

この組曲は現代日本作曲界の雄、清水脩氏により1948年作曲され、この中、第二曲“秋のピエロ”は同年に行われた第三回合唱コンクール課題曲に当選した。詩は堀口大学氏の作になる五連の歌。

全曲を通じて抒情的な旋律が流れ、哀愁・悲劇的な情熱・自棄的な冷笑。そしてセンチメンタリズムとアラベスクと言う様に五曲は互に対比し、それが各曲に繰り返される“月光とピエロ”による詞のハーモニーは都会人のベースとメラソリーを暗示し風刺している様である。





早稲田大学グリークラブ

つまびらかではないが早稲田大学グリークラブはかなり古くからあつたようで、大正の中頃、すでにその記録が音楽史上に見られている。戦前もずつとコンクール、その他に活躍し、戦後は新たに結成された早稲田大学音楽協会所属の合唱団として復活し、第一回関東合唱コンクール大学の部に優勝し、以後毎年、演奏会、放送等に活躍し、コンクールに於ては二位以下に下つたことなく、殊に第四回全日本合唱コンクール学生部の部に於て優勝を遂げた。此の年、関西学院グリークラブと非公式で交歓演奏会を開き、これが契機となつて以後毎年交歓会、演奏会を開いている。

現在部員は百数十名を教え、専任指揮者として先輩磯部淑氏をお迎えした所今年五月病にたはれられて以来、学生指揮者木下林策が現在代つてこの任に当つている。

曲目解説

英国民謡

我々が幼い時より口づきみ親しんでき、そして余りにも日本化されたスコットランド、アイルランド、イングランド民謡中より6曲を英国民謡として、ここに再び新しく伊藤武夫、大木惇夫両氏による原曲の持ち味を十二分に生かした訳詩でお送りする。

或る意味に於て民謡こそ永遠の名曲中の名曲ではなからうか。

ねずみ

この曲は我々の指揮者である磯部淑氏が病氣恢復直后、グリークラブのために書き下して下さつた男声合唱である。明星派の詩人、与謝野晶子の詩によるもので、その中に詩はれているヒューマニズムは男声合唱でなければ表し難いものである。

Die Allmacht (全能の神)

V. Lachner (1811—1893) は Schubert の友人で、交響曲を書いた Lachner とは異なる。この人の男声合唱には優れたものが多く、Die Allmacht はあまり知られていないが、高度の技術を要する内容の深い名曲である。

作詩は L. Pyrker (1772—1849) になるもので、全能の神エホバの自然に表れた偉大な力を歌つたものであつて、当グリークラブの訳詩になるものである。

幻を追いて (Schlafwandel)

F. Hegar の初期の作品で、男声合唱としては“剣と堅琴”などと共に良く知られた曲である。

戦場に臨む兵士の夢に故郷をしのぶ G. Keuer の詩を、山口隆俊が訳詩したもので、七分余りを要する大曲である。

慶応義塾ワグネル・ソサイエティー

ワグネルが創立されたのは明治三十三年であり今日で五十三年になる声楽部が最初の試みとして「ドナウ河の漣」の一節に、新作の歌詞をつけたのである。それが明治三十五年五月であつた。

明治三十九年ワグネル最大の功労者、大塚淳先生を指導者に頂いた。明治四十一、二年には遠く満洲にまで演奏旅行に行つている。大正年間にワグネルの活動はその頂点に達し外国よりの演奏者の来遊と相俟つて楽壇上に大きな地位を占むるに至つた。大正の末、大塚先生の関係から当時上野の生徒であつた、橋本国彦氏、木下保氏が来られ御指導下さつた。この頃より昭和初年にかけては正に黄金時代であつた。その時代よりワグネルは三田大ホールより、日比谷公会堂、青年会館に進出し、戦の渦中に巻き込まれる頃に至つても定期演奏会は欠かさずに行われていた。終戦後三田の山の荒廃にもかかわらず、会員は再建の意気に燃え、伝統に励まされて、昭和二十一年十二月二十三日、帝劇に於て、盛会裡に催された。

曲目解説

日本歌曲集

帰ろ歸ろ

北原白秋詩 山田耕筰作曲

夕やけにそまつた田舎道を遊びつかれた子供達が、ネギ坊主を振り振り帰つて行く。全くこの詩らしい曲であり、古謡風な日本調を加えて、童謡として又歌曲としてよく歌われる。

きつねのちようちん

野口雨情詩 山田耕筰作曲

岡は満作、浜は大漁、お金が天から降つて来る。祭の後の静けさの様に、田圃の畦に狐の提燈がぼーともえている。

青蛙

三木露風詩 山田耕筰作曲

雨上りの水たまり一匹の青蛙、彼方を振向いては、又此方を向いては眼をパチパチ。おどけた可愛らしい曲。

叱られて

清水みつる詩 弘田龍太郎作曲

日本童謡として、広く歌われて来た曲である。

七つの子

野口雨情詩 中山晋平作曲

中山晋平の童謡の中では代表的な曲の一つ。

Schwbert

春

シラーの詩に作曲したもので、日本ではほとんど歌われていない曲である。軽い民謡風なこの曲は、ロバートショウ合唱団の名演奏によつて我々の耳に新鮮な Schubert の音楽を投入してくれた。

飛鳥の群

OP 64の3

自由こそ我が生命よ、その丘には希望の花開き、夕日に映ゆ。我又自由を求め急げども、道は苦しく迷へり、見よ、翔る鳥の群を、我が行手をゆだね飛鳥の群に従い行かん。

この様なラッペの詩に作曲したもので、効果的な転調を添えたリズムカルな曲である。

小夜曲

OP 35

シューベルトの生活とは切る事の出来ないフレッチャツヒ家のアンナに依頼され、友人のゲーリルバルツェルの詩に作曲したもの。始めは、メゾ・ソプラノと男声四部の為に書かれたが、後、女声四部に書き改められた。

